暮らしのぞき箱

季節を知ったら
暮らしが楽しくなった

～第一六〇号～

立秋（りっしゅう）　八月七日

御白石持行事

例年にない酷暑の中の御白石持行事となりました。

内宮前の四つの町で結成された宇治奉献団は初日の一番に、晴れやかに御白石を奉献しました。色鮮やかなブルーの半被姿の人々が水しぶきをあげて木そりを曳いたり、新御敷地で御白石を納めたりする様子がテレビに新聞に掲載されていました。翌日、宇治の町へ行くと、家々の軒下には、そのブルーの半被が洗濯され、ずらりと干されていました。その数は十着近く。家族だけでなく、遠方からの親戚も来ていたのでしょうか。奉献も済み、一息ついたところかと思ったら、そんなことはありませんでした。朝から、特別神領民のお出迎えをしていたのです。

今回は全国から七万人を超す人々が、特別神領民として御白石持行事に参加します。内宮へは朝八時からおはらい町を通って二台の奉曳車を曳きます。沿道の宇治の人々は半被姿で開店前の店先で、冷たいお茶を用意し、配っていました。そして、特別神領民が曳き始めると、その奉献を盛り上げるように、エンヤの掛け声をかけます。

「なにもせずにはいられないから、ここでお迎えしています」とボランティアの人々は言います。

また、五十鈴川の新橋のたもとでも冷たいお茶を配っていました。「どうぞ」の声に、私も一杯いただきました。のどにしみわたりました。

ここでは、川曳をする地元の奉献団を迎えていました。ザイをもった木遣り子が川岸に立ち、川曳の奉献団が木遣りを歌うと、今度は宇治奉献団が木遣りを歌って返すのです。内宮に最も近い町の宇治奉献団。内宮へ御白石を奉献する人々を迎えるという大きな役割を担っています。

文　千種清美

伊勢内宮前
おかげ横丁